

## トキメキーSparkling Joy プログラム

(すべてオンライン(WEB サイト、ZOOM)で行います。参加申し込み者には、別途参加方法をご連絡いたします)

開催日 2021年8月28日(土)・29日(日) 対話型セッション

ALCE 研究集会 WEB サイト <http://tera92.sakura.ne.jp/alce202012/>

言語文化教育研究会 WEB サイト [第9回研究集会-言語文化教育研究学会 \(alce.jp\)](http://alce.jp)

### 8月28日(土) 対話型セッション

#### 10:00～ ZOOM ルーム Open!

- ・お供(お菓子やおつまみ、飲み物)持参どうぞ～
- ・対話型セッションの楽しみ方のご案内

10:15～ 研究集会 趣旨説明 参加方法の説明とお願い  
全体モデレーター 佐野香織(長崎国際大学)



#### 10:30～12:00 セッション1

##### トキメキ・チャレンジを語ろう

松本明香(東京立正短期大学)・米本和弘(東京医科歯科大学)

#### 12:00～13:00 Lunch Time セッション



#### 13:00～14:30 セッション2

##### 「ウェルビーイング×対話」×ことばの教育

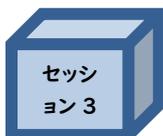
— 対話を通して幸せな心の状態(well-being)を育むワークショップ —

荻野雅由(カンタベリー大学)

石垣真帆・金澤真奈・木村亜貴・齋藤 みずほ・坂口真実子・佐橋啓空 (一般社団法人ウェルビーイングデザイン認定ファシリテーター)

小川靖子(国際交流基金ジャカルタ日本文化センター)

#### Refreshing Time



#### 15:00～16:30 セッション3

##### トキメキの国 ALCE

後藤賢次郎(山梨大学)・佐野香織(長崎国際大学)・瀬尾匡輝(茨城大学)

中川正臣(城西国際大学)・福村真紀子(多文化ひろばあいあい, 茨城大学)・古屋憲章(山梨学院大学)

## 8月29日(日) 対話型セッション

10:00~

### ZOOM ルーム Open !

- ・お供(お菓子やおつまみ、飲み物)持参どうぞ~
- ・対話型セッションの楽しみ方のご案内

10:15~

研究集会 趣旨説明 参加方法の説明とお願い  
全体モデレーター 佐野香織(長崎国際大学)

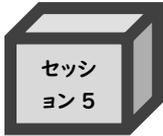


### 10:30~12:00 セッション4

#### メルロ=ポンティでときめく!?

—メルロ=ポンティの言語論と思考と言語の表現活動—  
西口光一(大阪大学)

### 12:00~13:00 Lunch Time セッション



### 13:00~14:30 セッション5

#### ホンマにトキメかなアカンのですか

後藤賢次郎(山梨大学)・瀬尾匡輝(茨城大学)・檀佳世(ヒューマンアカデミー)

### Refreshing Time Yoga

インストラクター 濱田典子(秋田大学)

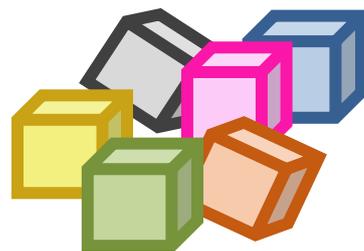


### 15:00~16:30 セッション6

#### 私と学会の関係を捉え直す

—トキメイト学会参加するために—

両角遼平(広島大学大学院)・小栗優貴(広島大学大学院)



8月28日(土) 10:30~12:00



## トキメキ・チャレンジを語ろう

松本明香(東京立正短期大学)・米本和弘(東京医科歯科大学)

みなさん、こんにちは!

突然ですが、みなさんはトキメキにチャレンジしてみたいと思いませんか?

ですが、そもそも、トキメキって何さ?それにチャレンジするって、どういうことさ?と思う方もいるかもしれません。

ここでは、「トキメキ」とは、今まであまり馴染みがなかったけれど、ちょっと足を踏み入れてみようとする、新しいコトや新しい世界に寄せる思いとします。では、なぜそのトキメキにチャレンジすることを提案するのでしょうか?

2020年4月、コロナ禍において全国の教育機関ではオンライン授業が実施され、不慣れなオンライン授業の準備段階にいた教員が多かったと思います。私(松本)の勤務校では4月20日からオンライン授業が開始され、入学した学生と直接会うことのないままオンデマンド等で授業に踏み切らなければなりません。一方で、本来なら春特有の希望と緊張感に満ちた生活を送る時期なのに、登校してきてはいけないと言われた学生たちは家でどんな生活を送っているのだろう、という心配も湧きあがりました。故郷から離れて東京に来た学生たちは、思うように外出もできず、不安のまま生活しているのではないかと。せっかくの大学生活なのにダラダラ過ごしてはいないだろうか。大学に入学したものの、目標を見失っていないだろうか…。

そんな中思いついたのが、「GWチャレンジ」でした。「ゴールデンウィークの間、なんでもいいから好きなこと(トキメキ)を一つ7日間やり遂げよう!」と、学生たちと呼びかけました。そしてそのチャレンジを設定した理由や達成感、難しかった点などを、事後に教えてもらいました。学生たちの出来はなかなか。学生たちは、面白いチャレンジの経験を紹介してくれました。それぞれが、それぞれの場所で、ちょっと新しいことに挑戦する、その振り返りを共有する。学生たちの経験の紹介の文面から、少し生き生きしたものを感じたのでした。

今回の研究集会では、「トキメキ・チャレンジを語ろう」の企画に参加されるみなさんにも、事前準備として、それぞれの「トキメキ」に1週間チャレンジしていただきたいと思っています。参加者の皆さんとはスプレッドシートを共有し、自分のトキメキに寄せる感覚を、他の方々と共有し続けられるような仕組みを作ります。毎日メモ程度に、チャレンジ中の気持ちを書き込んでください。よーし、頑張るぞの気持ち?新鮮な気持ち?かったるなあとといった気持ち?そんな気持ちを持ち寄って参して、企画当日にグループでディスカッションに参加していただきたいと思っています。(企画をしている私たちも、もちろん新たな「トキメキ・チャレンジ」を画策中!)

思うように人に会えずに、そして思うようにしたいことができない生活を経験した私たちは、この環境の中でも、人とつながることの大切さ、前に踏み出すことの大切さを実感してきました。これらの大切さに対する思いを教育の場で共有するには、どうしたらいいか、そこにはどんなワクワクや課題があるのかを話し合える場にできたらと思っています。あるいは、ポスト・コロナの世界でもリアルに人とつながる意味はあるのか?前に踏み出す必要ってあるのか?といった議論になるかもしれませんね。

小さな小さなチャレンジが、みなさんの話のタネになればと思っています。みなさんとお会いでき、つながれるのを楽しみにしています。

[プログラムに戻る](#)

**8月28日(土) 13:00~14:30**



## 「ウェルビーイング × 対話」 × ことばの教育

— 対話を通して幸せな心の状態 (well-being) を育むワークショップ —

荻野雅由 (カンタベリー大学)

石垣真帆・金澤真奈・木村亜貴・齋藤 みずほ・坂口真実子・佐橋啓空 (一般社団法人ウェルビーイングデザイン認定ファシリテーター)  
小川靖子 (国際交流基金ジャカルタ日本文化センター)

みなさんのこれまでの教育実践のキーワードは何でしょうか。そして新たにどんなキーワードを加えたいですか。世界がコロナという前代未聞のウイルスと闘っている 2020 年 12 月、世界は「風の時代」に突入したと言われ、21 年のダボス会議では「グレートリセット」がテーマとなりました。私たちは見えないものに価値を置き、すべての社会システムを再構築する時代に生きています。技術革新で産業が栄えた「土の時代」は「所有・固定・安定・組織・成功」など物質的な価値観が大切とされていました。しかし「風の時代」では「体験・共有・流動・仲間・成幸」など精神的・内面的な価値観へのシフトが指摘されています。

この時代におけるキーワードの一つとして、「持続的な幸せ」「身体的・精神的・社会的に良好な状態」を意味する「ウェルビーイング」が挙げられます。シリコンバレーの先進企業が導入した、社員の「幸福」の向上を専門とする Chief Happiness Officer (最高幸福責任者) が日本でも注目を集めています。私が在住するニュージーランドでは、「国民の幸せは国の義務」として「ウェルビーイング予算」を世界で初めて国家予算に組み込みました。

応用言語学においても、2016 年以降は「外国語教育・習得研究におけるポジティブ心理学の開花の時代」(Dewaele ほか 2019)と言われ、セリグマンによるウェルビーイング理論では、幸せを構成する要素=PERMA (Positive Emotion ポジティブ感情、Engagement 何かに没頭すること、Relationship 豊かな人間関係、Meaning 人生の意味や意義、Accomplishment 目標達成)が提唱されました。さらに第二言語習得研究者の Oxford (2016) はこの5要素を語学学習に発展させ、EMPATHICS を提唱しています。

今回のワークショップでは、ウェルビーイング、そして語学教育の接点について概説し、ウェルビーイング・ダイアログ・カードを利用した参加者間の対話を行います。カードにはさまざまな「問い」(質問)が書かれています。その「問い」についての対話は、自己内省や他者洞察を促し、これまで意識していなかった価値観や教育観、そして新たなトキメキを浮かび上がらせるかもしれません。

ワークショップの目的は、ことばの教育でつながる人たちが、ことばや教育についてではなく、ウェルビーイングについて対話する場を提供することです。また、ことばの教育に携わる私たち自身がウェルビーイングについての理解を深め、自分のウェルビーイングを高めていくことは、これからの教育を切り拓いていくためにも大切なことであると思われます。

自分のウェルビーイングを見つめ、他者との違いや共感を得るおだやかな対話の場をみなさんと創造・共有できることを願っています。

### 参考文献

Dewaele, J., Chen, X., Padilla, A. M., & Lake, J. (2019). The flowering of positive psychology in foreign language teaching and acquisition research. *Frontiers in Psychology*, 10, 2128–2128. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2019.02128>

[プログラムに戻る](#)

**8月28日(土) 15:00~16:30**



## トキメキの国のALCE

後藤賢次郎(山梨大学)・佐野香織(長崎国際大学)・瀬尾匡輝(茨城大学)

中川正臣(城西国際大学)・福村真紀子(多文化ひろばあいあい, 茨城大学)・古屋憲章(山梨学院大学)

3つの委員会の各委員がそれぞれどんなことにトキメキ、どんな想いをもって企画をたて、運営をしてきたのか、熱く語ります。この語りをもとに、みなさんと対話、トキメキを展望し、いっしょにトキメク活動を考えて行きます。活動は考えるだけでなく、実際に実践へとつなげていきます。

### 交流委員会(福村真紀子・中川正臣)

言語文化教育研究学会・交流委員会では、毎年1回「ヒューマン・ライブラリー」を開催しています。ヒューマン・ライブラリーとは、その名のとおり「人の図書館」です。人が「本」になり、その人の生き方や人生を語ります。参加者である「読者」は「本」を借りることができ、「本」の語りを聴くことができます。私たちはこれまで、「言語教育におけるインクルーシブ教育」「複言語・複文化家族」など、さまざまなテーマでヒューマン・ライブラリーを開催してきましたが、これは、私たちの「トキメキ活動」の一例です。交流委員会では、サークル、分科会の立ち上げをサポートしています。「こんなトキメキ活動をしたい!」と思ったら、交流委員会にご相談ください!一緒に考えて、動いて、トキメキ活動を楽しみましょう!

### 企画委員会(古屋憲章)

企画委員会は、例会と特別企画を企画し、運営しています。企画委員会で会を催すにあたり、重視していることは、こちら→<http://alce.jp/monthly/>の「例会のご案内」に書かれていますので、ご参照ください。

#### 【企画委員としての私のトキメキ】

- ・他の委員や話題提供者と協働で一回限りの場を創ることができる。
- ・ひよんなききっかけや思いつきから企画(例会、特別企画)が始まることもある。
- ・最初はあまり関心のなかったテーマでも、打ち合わせや本番でやりとりをしているうちに、だんだん関心を持つようになることがある。
- ・例会でも、特別企画でも、即興的にやりとりが行われる。そのため、実際にやってみなければどのような会になるかわからない(もちろん大まかな流れはあるにせよ)。
- ・ある企画がきっかけになって、別の企画につながったりする。

### 研究集会(後藤賢次郎・佐野香織・瀬尾匡輝)

研究集会は、「開催 地域で特に話題や議論になっていることをテーマにし、参加者が語り合える場を創出することを目的にしています。また、語り合う場を研究集会の会場に限定せず、一過性ではない継続的な議論を目指します」とされています。そのコンセプトとして、対話を重視した集い、様々なカタチ、があります。こうした研究集会を研究集会委員はどのように研究集会をつくってきたのでしょうか?そしてこれからはどのようにつくっていくのでしょうか。あなたもトキメク研究集会をいっしょにつくってみませんか

[プログラムに戻る](#)

8月29日(日) 10:30~12:00



## メルロ＝ポンティでときめく!?

— メルロ＝ポンティの言語論と思考と言語の表現活動 —

西口光一(大阪大学)

話題提供者の関心は、個別言語への関心を基礎とした言語教育から離脱して、言語の本質を見極めた上で言語教育を構想することであり、そのための言語の本質についての考究を深めることである。そうした作業をしないと、人文学の一分野として自立した言語文化教育学を確立することができないと考えている。そのような関心と問題意識の下に、これまでも心理学や社会学や人類学等の理論の探究に取り組んできた。そして、この数年は、哲学の歴史をも展望しつつ、近代哲学から現代思想への移行の重要な契機の一つとなった現象学を背景としてメルロ＝ポンティの思想に取り組んできた。本セッションは、そうした研究の成果を報告し、メルロ＝ポンティの思想と言語文化教育の関連を検討しようとするものである。

話題提供者は、言語現象を軸としてメルロ＝ポンティの思想を検討した。今回の話題提供での注目点を、哲学的な用語は文末( )内以示して、箇条書きにすると、以下のようになる。

1. わたしたち人間は時間的・空間的な特定の位置に居て、そこにおいて生きることを営んでいる(世界内存在)。こうした視点に基づく思想を現象学の当面の到達点と見ている(ハイデガーの実存の現象学)。
2. 世界というのはあらかじめそこにあるのではなく、人が文化歴史的な身体を基点としてそれに向かって生きることを営もうとすることで立ち現れるものである。そして、その当事者自身もその立ち現れた世界をまさに経験している者として存在する。
3. 一般にノエシス(経験の仕方) - ノエマ(経験されるもの) 相関として説明される志向性(intentionality)は作用志向性である。メルロ＝ポンティはそれとともに、後期フッサールが提示した作動的志向性に注目する。
4. 作動的志向性とは、ごくわかりやすく言うと、2のような世界と当事者を時々刻々に現成させる働きである。
5. 言語(langage)のシンボル化機能は作動的志向性の一部だと見ることができる。
6. 言語は、イントネーションを媒介項として、具体的な語系列に至ることができる。イントネーションには生命体の活力が吹き込まれている。
7. 発話とは「イントネーションという舟の上に乗った語系列」である。

このようにメルロ＝ポンティの現象学と言語論を確認した上で、その思想の意義や示唆や洞察を参加者といっしょに考えたい。

参加予定の皆さんには当日までの「頭をこなす」作業として以下のようなテーマについて考えてほしい。

教室にいる学習者一人ひとりも上の1から4のように世界と自己を現生しつつ新たな言語(langage)である日本語を身につけようとしている。そして、そうした学習者の経験の基本は直接あるいは間接に教師が「演出」している。自身の言語文化教育の実践でどのような経験を学習者に提供してきたか、また、その経験はどのような蓄積となって学習者の言語文化コンピテンシーの育成に貢献しそうか、などを振り返ってみてください。

また、言語論へとつながる「メルロ＝ポンティの現象学」に関心のある方には、『知覚の現象学』の序文(pp.1-24)の繙読をすすめる。

[プログラムに戻る](#)

**8月29日(日) 13:00~14:30**



## ホンマにトキメかなアカンのですか

後藤賢次郎(山梨大学)・瀬尾匡輝(茨城大学)・樋佳世(ヒューマンアカデミー)

### 1. 本話題提供セッションの目的-経緯と問題意識-

本話題提供セッションは、3月のプレ企画から生まれました。

プレ企画では、参加者が持ち寄った「トキメキ体験」について共有した上で、トキメキが生まれるプロセスや条件、その時の気持ちの詳細について話し合われました。この話し合いの中で、「トキメキとは個人によって全然違うそうだけれども、似通っているところもありそう」「前向きな気持ちの全てをトキメキと呼ぶわけではない」「トキメキと呼ばなくても、トキメキを感じなくてもよい気持ちや場面もある？」…といった、ぼんやりとした気づきや疑問が、企画者たちの間に湧き上がってきたのです。

こうした気づきや疑問をもとに、トキメキはポジティブで聞こえが良い言葉ですが、それを求めることが自明になりやすいのではないのでしょうか、少し立ち止まり、あえて斜に構えてみて、トキメキについて本質的に考えてみることを目的とした場を作ろう、という問題意識を得るに至りました。

### 2. 本話題提供セッションの内容

上記の問題意識から、トキメキを感じる自身の基準に目を向けたり、それらを他の人と比べたりする交流する場を作りたいと思います。具体的には、研究集会に先立って、

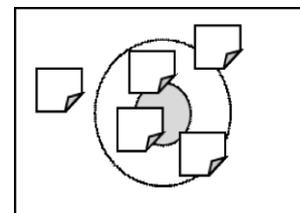
1. 研究集会参加の有無に関わらず、事前に広くアンケートによって「トキメく時ってどんな時？」を募ります。Twitterをお使いの方は、ハッシュタグ「#ALCEときめき」をつけて、あなたの「トキメく時」をツイートしてください。Twitterアカウントをお持ちでない方は、

こちらの [Google Forms \(https://forms.gle/qDatDWdR2tuC7eQx8\)](https://forms.gle/qDatDWdR2tuC7eQx8) からお答えください。

2. 企画者の研究集会委員で、人によって位置付けが分かれそうな「トキメく時ってどんな時？」の回答を5つ選出します(個人が特定されないよう、また意見を言いやすくする目的で、回答の一部を加工する可能性あり)。を行います。そして研究集会当日は、参加者の皆さんには、選出した5つの「トキメキ付箋」を、オンライン上の同心円が描かれたワークシート(名付けてトキメキターゲットモデル(右下図):同心円の中心ほど強くトキメく、外側ほどトキメかない、同心円の外はトキメキ圏外)に、まずは個人で位置付けてもらいます。

3. その後、ブレイクアウトルームで少人数のグループに分かれて、それぞれが位置付けたトキメキ付箋について、
  - 1) ワークシートのどこに置いたかを共有します。
  - 2) 人によってトキメキのポイントはどこが違うか/同じか、なぜ違うのか/同じなのかを議論します。
  - 3) どうしたらトキメくのか、グループで「トキメキ3条件」を挙げてもらいます。

4. 全体共有、まとめを行います。



以上の交流を通して、「ホンマにトキメかなアカンのですか」に迫っていきます。

[プログラムに戻る](#)

**8月29日(日) 15:00~16:30**



## 私と学会の関係を捉え直す

—トキメキ学会参加するために—

両角遼平(広島大学大学院)・小栗優貴(広島大学大学院)

### 1. 本企画の目的・背景・問題意識

企画者たちは、いわゆる“若手”として様々な学会や研究会に関わる中で、なぜ若手研究者の参加が少ないのだろうという寂しさを感じていました。そもそも研究者の世界において、若い年代の人々の割合が少ないからではないかというご意見もあることでしょう。しかしながら、各学会の若手研究者や若手参加者に学会参加をためらう理由を聞いてみると、「研究者としての力量が未熟だから遠慮してしまう」、「学会の仕組みや作法を知らないし、知り合いが少ないから居心地が悪い」、「大会に参加したのはいいけれど、「それっきり」「やりっぱなし」になることが多くて、また行こうと思えなかった」、「学会本部を特定の大学OB/OGが仕切っていて、よそ者扱いされている気分になる」といった声が聞かれました。これらの声からは、若手研究者がそれまでの学会参加経験から、自己の肯定感や効力感を感じづらかったこと、そして他の参加者などからの応答性が低かったことを理由に、参加意欲が減退していった姿が見えてきます。

本セッションは、①学会が抱える参加意欲が生まれづらい環境と②既に構築されている社会(学会)に新参者として加わることの難しさの2点を問題としつつ、「私たちが研究という営みに感じた“トキメキ”を大切にしながら、学会というコミュニティにどう参加していけるのだろうか?」というやや大きなテーマについて、参加者のみなさんと考えます。

### 2. 本企画の内容

以上の目的・背景・問題意識をもとに、研究集会当日は現役院生である両角・小栗が若手の立場から学会参加の際に感じるもやもや、気まずさ、息苦しさのようなものを提起しつつ、参加者のみなさんのもつ複数の学会での経験を踏まえて語り合います。

1. 企画の趣旨説明
2. 自己の経験の対象化：これまでの私の学会への参加を振り返ろう
3. 視点の獲得：学会(社会)に“参加”するとはどういうことだろう?  
→両角と小栗による「既存の社会への“参加”」をめぐるいくつかの概念の説明
4. 経験の共有(ブレイクアウトセッション)：みんなの学会への参加経験(ストーリー)を聞いてみよう
5. まとめ：変化の激しい今・これからの学会に私(たち)はどう“参加”していくのだろうか?

### 3. 本企画の意義

- ・若手研究者が抱える“個人的な問題”を参加者のみなさんと共有し、“社会的な問題”として位置づけながら交流すること。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、昨年からは各学会の研究大会等のあり方が大きく変化してきている中で、これまでの自身の学会への参加経験を振り返り、これからの参加のあり方を考える機会を提供すること。
- ・参加者個々人のもつ複数の学会での経験を踏まえた語り合いを行うことで、研究コミュニティの情報交換の場になること。

[プログラムに戻る](#)